

Title	Roger Mauduit, Auguste Comte et la science économique, 1929.
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1930
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.24, No.1 (1930. 1) ,p.99- 105
JaLC DOI	10.14991/001.19300101-0099
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19300101-0099">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19300101-0099</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一、ジョン・グレイ、ロバート・カーエン、ロードベルトス等の勞働貨幣論との比較検討を要すること做す者であることを一言するに止める。

終りに筆者は御多忙中にも拘らず親しく本稿閱讀の勞を執られた金原賢之助教授に深き感謝の意を表する。(昭和四年十一月四日追記)

Roger Mauduit, Auguste Comte et la science économique, 1929.

永田清

オオギュスト・コントの論ぜらるゝことは極めて多い。併し乍ら、其の主要なる研究對象は、殆ど全く「社會學」建設者としてのコントであり、實證哲學者としての彼れである。其の理由は恐らく、彼れの全著作が二十八卷の多さに及び、且つ其の中に甚だ浩瀚なる「實證哲學講義」並に「實證政治學體系」を加ふるに拘らず、彼れの最大關心事が専ら「社會學」及び實證哲學に局限せらるゝからであらう。素より、この點に於ける彼れの貢獻と其の影響との極めて大なることは異論なきところである。然かも、コントは實證哲學を基礎とする「社會學」を説くと同時に、經濟學に關する許多の卓拔なる批判と建設とを企圖して居る。而してこの「社會學」の一部として説く經濟理論が、其の後の佛蘭西經濟學、獨逸歴史學派に大なる影響を及ぼしたことは拒むことが出來ない。茲に紹介せんとするモオデューイの「コントと經濟學」は、經濟學者としてのコントを論じた最初の著作である。筆者は、他日稿を改め、佛蘭西經濟學に於ける社會學派研究の一節にコントを論じ度いと希つて居る。本稿に於ては、姑らく前掲書の簡單なる紹介にとどめる所以である。

「近代著作家の著書の中に於て國富並にこれに關係ある諸書を繙くとき、經濟學と稱せら

るゝものは、言辭の亂用であり然かもこれを一個の科學たらしめんとして無益に苦しんで居るとの確信が直ちに生じ来るものである。(Donald, Pensées, ed. Migne, 1859, t. III, p. 1335)

モオデューイは、「コントと經濟學」の冒頭に斯くの如きボナアル瞑想録中の一節を掲げて居る。此は恐らくコントがジョセフ・ド・メートル、ラムネ、ボナアルに於ける基督教的社會學の影響をうけ(フリュンティエール「佛蘭西文」)、經濟學の論理的完成を求めてこれを其の「社會學」の中に包攝せし意味を示すものであらう。然らば、何故にコントは經濟學の科學としての獨立性を疑ひ、社會學の創設を企圖したか。

先づ本書の第一章は、コントが如何にして經濟學の批判者となつたかの経緯を説いて居る。こゝに謂ふ經濟學が當時に至る迄の自由主義經濟學たることは勿論である。著者モオデューイはコントの經濟學に對する態度を前後兩期に分ち、一八一五年より同二〇年頃迄を其の前期、其れ以後を後期として居る。理工科學校時代の若きコントは自由主義者にして、自由主義經濟學の讚美者であつた(ウアラアへ)。一八一六年該學校を退いて後も、コンドルセエ、モンテスキューを賞讃し、ヒューム、(の手紙參看) スミスに敬服すること極めて大であつた。社會に關する一切思索の基礎となるものは、スミスによつて建設せられたる經濟學であると考へて居る。素より、コントはサン・シモンの影響をうくる以前より、當時に於ける經濟學の不完全——其の狹隘なる事實と科學的特質の缺如とを認めて居た。けれども、一八一八年はじめてサン・シモンの門に入るに及んで殆ど熱情的に其の師の思想をとり入れたのである。

一八二〇年頃より、サン・シモンもコントも、次第に經濟的自由主義より遠かつて行つた。事實上、ある意味に於て、サン・シモンの「産業主義」は絶えず變り行く彼れの思想の一象相にすぎざるものである。而してコントに於ける政治的自由主義の放棄は、必然的に彼れをして經濟的自由主義より離隔せしめた。こゝに又、コント及びサン・シモンをして經濟學より益々遠からしめた新事實が生じた。ジョセフ・ド・メートルの「法王論」の出現は其れである。ド・メートルに従へば、統一は社會に於ける究極の目的である。破滅と死との萌芽たる異端と統一の否定とは、あらゆる手段によつて廢除されねばならぬのである。斯くして、コントは事實上經濟的自由より生じたる社會闘争を明白に認めた。雇主と労働者との間には極めて明白なる利害の對立がある。競争と自由とは雇主をして其の地位を亂用せしめ、其のために搾取の事實が生ずると謂つて居る。コントに於て、この社會闘争は社會の階段的發展と知的改良によつて解決せらるゝものである。こゝにコントに於ける神學者の影響が認められる。ボナアルの「一般的意志」ド・メートルの社會法則がコントに於ける社會概念の基礎となるのである。コントに於いて、個人は全體の從屬物にすぎぬ。この「集合理性」の理論、個人の價値の否定が、彼れをして必然的に個人主義及び自由主義經濟學の否定に導いた。然かも、コントの眼前には、「自然的秩序」の薄弱性を明示する經濟的事象の變革が生じた。佛蘭西に於ける産業革命の完成と著しき經濟上の進歩とが其れである。斯くして、コントは遂に自由主義經濟學の敵となつたのである。

著書モオデューイは、續いて、經濟學に對するコントの一般的批判を述べて居る。コントの經濟學に關する知識は決して深いものではなかつた。併し乍ら、サン・シモンの門下となつてから、セイ、デュソワイエ、シャルル・コントと往復し、ヒューム、スミスに私淑した。ある意味に於いて、コントは哲學思想上に於いてヒュームの子であり、其の倫理觀に於いてスミスの「道徳情操論」に學ぶものである。又、「實證哲學講義」第四卷第七章には「不朽の名著」として「國富論」が挙げられて居る。「人口論」も亦、コ

ントの書齋に藏せられてあつた。この外、ベンタム、デテュ・ド・トラシイ、クルノーと學問上の交渉があり、且つ、ジョン・スチュアアト・ミルとの交友が一八四一年十一月十二日より同四七年五月十八日迄続いたことは、周知の通りである。社會改良家にしてコントと交渉のあるものに、サン・シモンの外、ルイ・ブラン、ブルドン、ゴッドウイン、ウォルストンクラフト、オオエン、フウリエ、カベエ、ピエエル・ルルウ、シスモンデイがある。コントは、學としての富の科學の廢棄と經濟的自由に對する鬭争とを試みるものであるが、この努力は當時の社會改良家の其れと次の二點に於て異つて居る。第一は、批判の科學的態度であり、第二は、知的、精神的改良の企圖である。斯くして、實證哲學を基礎とする社會學を建設し、社會發展に於ける神學時代、形而上學時代、科學時代なる三階段の法則を樹立した。コントに従へば、經濟學は、本質上、形而上學時代の一產物であり、明らかに廢滅への道を行くべき特質を具有するものである。經濟學に於ける抽象的演繹的方法是棄てられ、歴史的比較的方法が、これに代るべきものである。(實證哲學講義 義四八章)コントは、社會現象に於ける法則の存在を認める。併し乍ら、彼れに従へば、斯る法則は時間的なる發展過程に於いて觀察せらるべきである。コントに於ける歴史的相對主義はこれである。素より、彼れ以前に、社會學的法則の相對主義を究明した者は多い。けれども、相對主義の精確なる定式と社會法則の歴史的變性とを提示したものは、コントを以て嚆矢とする。この故に、コントの社會學は、科學たる限り、歴史學に屬すべきものである。コントを以て歴史哲學者となすのはこの故である。

方法論としての經濟學批判の外に、コントをして經濟學より乖離せしめた他の理由は、當時の社會問題に對する經濟學者の無關心なる樂觀的態度である。産業革命の子として生れたる大産業と經濟的自由とは、圖らざる困難事を惹き起した。一八二八年頃、既にコントは機械使用の勞働者に及ぼす危険を認めて居つた。彼れは、經濟學者が樂觀的態度を以て自然的秩序を説くの不可能を確信したのである。ブルンティエールの所謂十八世紀哲學の敵ド・メトル、ボナアル、ラムネの思想に影響せられた反個人的自由論が、その基調となるものである。猶ほ、經濟學なる名辭の不明確と混亂とに對するコントの非難に對して、著者モオデューイは次の如き評言を加へて居る。曰く、「經濟學なる名辭の不明確を難するは、ミネルヴァの如くデュピタアの腦髓より武装して跳び出し來らざるを恨むに等しい」と。

コントは以上の如く、經濟學の破壊を企つるのみならず、ある意味に於いて、その再建設に努力し、富の現象を以て一般的社會學の中に包攝せしめた。而して、彼の經濟理論は生産論、階級鬭争論、勞銀論等に限定せられて居る。コントに従へば、生産とは社會に從屬する各人が、社會的利益を目的として遂行する一機能である。従つて財産は社會的特質を有すべきものである。故に國家の職能はこの社會的特質を作用せしむるに在る。併し乍ら、彼れは反個人主義者たると同様、又、反國家主義者であつた。國家による生産の統制、組織は、これを認めないからである。然らば、社會主義共產主義に對するコントの地位は如何。

事實上、コントはサン・シモンと等しく私有財産及び個人的企業の贊成者である。唯だ、これと同時に、所有權並に生産の社會的特質を強調する。企業者の機能が社會化せられるであらうと説くのは、この意味に於てある。コントは明らかに、共產主義、社會主義への社會の必然的發展を認め居る。然かも、プロレタリアの精神的向上、社會の知的改造を求めるところに彼れの特徴が認められるのである。斯くの如く、コントの社會思想に對する考察は、雜然たる皮相的見解にすぎざるものであるから、著者、モオデューイは、彼れを以て「左翼に在る人」(un homme de gauche)と稱して

居る。蓋し當を得たる評言であらう。猶ほ、コントは、勞働權の確立を認め、搾取の事實、階級闘争の發生を論じたけれども、其の科學的なる基礎づけを全く怠つて居る。彼れの經濟學批判が極めて科學的なるに拘らず、その建設的勞作がこれに劣ること數倍なるはこの故である。

然かも、その後の經濟學研究に及ぼせるコントの影響は蓋し大なるものがある。コントとミルとは、哲學上に於ては兩者其實證主義者であり、政策上に於ては極めて類似せるサン・シモン主義とベントム主義をとつて居る。素より、ミル自身に於ける歴史哲學と社會的相對性の概念はこれをコントに借りたものと謂ふべきであらう。換言すれば、ミルはコントの思惟の形式を独自の研究領域に適用したのである。併し乍ら、經濟學に關する限り、ミルを以てコントの門下とすることは出来ぬ。第一、ミルは經濟學の獨立性を要求し、第二に、經濟問題に關する限り、演繹的方法の必要を認めるからである。コントの思想と最も關係深きものは、獨乙歴史學派の學說である。コントは、社會的類型の進化を認め、時間的に社會を區別する。然るに歴史學派はこの相對主義を更に進めて、經濟現象に於ける時間的並に空間的相違を認め、且つ經濟學が推理の出發點を自利に求めるの狭量を難じて居る。

斯くして、著者モオデュイは、最後に、經濟學の進歩に對するコントの貢獻として先づ社會法則に於ける相對性の概念をあげる。素より、十九世紀末に於ける數理學派、オーストリア學派の擡頭は抽象論的方法への復歸を意味するけれども、著書モオデュイは歴史學派の所説を認めてコントの貢獻を主張するものである。第二の貢獻は、「自然的秩序」に對する批判である。今日吾人はデュヌワイエに於ける「絶對的競争」、バステリアに於ける樂觀論の現實的妥當性を信ずることは出来ぬ。而して第三の貢獻は社會學的立場よりする經濟學の理論である。コントは、富の現象の游離的研究たる

經濟學を以て、社會科學に從屬せしめんとした。この試みは素より充分なる成功をおさめたとは謂へぬ。併し乍ら、現代の佛蘭西社會學派は、コントの實證哲學を繼承して具體的なる現實を研究し、その法則を探究する個々の社會科學の綜合を認める。斯くて、著者モオデュイは明らかに經濟學の獨立性を認め、猶ほ且つ經濟學がコントの方法論を基礎とすべきを論じて居る。曰く「經濟學はその假定的特質と尊大とを失ひ……而して後眞の科學としての樹立を看るであらう」と。